



来

司馬遼太郎全集 第九卷

第六回配本 功名が辻

定価 一八〇〇円

昭和四十七年三月一日第一刷
昭和五十六年十二月一日第六刷

著者 司馬遼太郎

発行者 杉村友一

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話(代表)〇三二六五二二二

印刷所 大日本印刷

製本所 大日本印刷

製函所 トーシキ

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

文藝春秋

功名が辻

司馬遼太郎全集 9

司馬遼太郎全集第九卷

功名が辻

5

司馬遼太郎の世界 尾崎秀樹

645

装幀 三井永一
題字 中田 功
A D 粟屋 充

功名が辻

目次

嫁の小袖	戦場	空也堂	姉川	唐国千石	長篠合戦	乱世の奉公人	十両の馬	鳥毛の槍	賤ヶ岳	家康	秀吉
9	23	38	53	89	112	128	141	159	195	213	240

春日遅々	掛川六万石	伏見桃山	虫売り	淀のひと	醍醐の花見	雲満つ	東征	大戦	再会	浦戸	種崎浜	あとがき
256	278	299	328	365	384	418	449	513	556	577	614	637

嫁の小袖

織田信長が、尾張清洲城から岐阜に本拠をうつしたのは、永禄十年九月十八日のことである。

清洲から岐阜まで八里。

織田家の将士三万のほかに、信長の内室濃姫、その侍女の群れ、さらに将士の家族まで行列にくわり、ちよつとした、

「民族移動」

の光景であつた。

むろん、独身の武士も多い。山内伊右衛門もそのうちのひとりであつた。

馬廻役、というから近衛士官である。

五十石。

知行はすくない。

伊右衛門は、トッパイの兜に、粗末な桶皮胴の具足をつけ、剝げ槍をかかえ、馬は脚がみじかく、ひどく老いぼれていた。

「ひどいなり、侍じゃな」

と、口にくそ出さなかつたが、沿道の村々の百姓、女房、こどもまでも、この「三ツ葉柏」紋の指物を背負つた若侍に、ひそかな嘲笑を送つた。

めだつのである。

尾張の織田家といえ、軍容のさかんなことで天下に有名で、侍の具足、槍、太刀などはみなきらびやかなものであつた。

その織田の家中のなかで、

「ぼろぼろ伊右衛門」

という異名をもっているのが、この若者である。ぼろぼろというのは後世の虚無僧のことで、まず、ていのいい食食というものであろう。

家中のうわさでは、極貧にそだち、一時はそういう社会にもいた。

が、容貌からは想像できない。

丸顔、色白で、貴人の子のおもかげがあり、頬の赤さに幼さを残していた。

かれの亡父のこと、少年時代の流浪、その苦難、それら過去のことは、筆者がかれにかわつて、おいおい物語るであらう。

こでちよつと将来のことを匂わせておくと、この家中で数にもならぬ貧乏くさい若者が、さまざま運命の段階

をへて、のちに土佐一國の太守になるといふ、数奇な人生を送る。

しかし、いまは、過去はどうでもいい。将来もいい。

ただ、若者にとって、

「現在」

が、ときめくような期待でふくらんでいた。

（千代殿とは、どういう娘か）

それをおもうと、御しているやせ馬の脚まではずむような思いがするのだ。

（美濃では評判の美人であるという）

縁談がきまっただけで、まだこの眼でその美貌の女人を見ることがない。

若宮千代。

というのが、その娘の名前であった。織田家の岐阜移転をしおに、伊右衛門一豊は、この娘と結婚することになる。

岐阜の新城下のはずれに、彼女を迎えるべき新居もできていた。

（おれにも、嫁が来る）

美濃の空は、真蒼に晴れている。

伊右衛門は馬上で、深く息をすいこんだ。

嫁、嫁、嫁、と、伊右衛門の胸が、かるいほこりをあげ

てゆく。

伊右衛門が岐阜城下の新居の門前にさしかかると、亡父以来の郎党が二人、路上に水を打ち、掃き清めて待っていた。

「おお、きれいになったな」

武家屋敷というのは名ばかりの小屋だが、それでも、貧弱ながら長屋門はある。この二人の郎党を住まわせるためのものである。

「五十石の小身には、すこしぜいたくすぎたか」

伊右衛門は、屋敷に入った。

拝領の敷地は、百坪。

そのなかに、台所、寝所だけの小さなかやぶきの母屋と、納屋を建てた。

それだけでは殺風景すぎるので、二人の郎党が、金華山（稲葉山）から、松、カエデ、ムクの木などを根びきしてきて、あちこちに植えている。

「これが、おれの屋敷か」

伊右衛門は、日あたりのいいぬれ縁にすわって、「邸内」を見まわした。

「しかし、いくらみても、おれの分際では大きすぎるなあ」

伊右衛門、気の小さいところがある。

「御小心な」

郎党の一人、祖父江新右衛門が、しかりつけた。

「そのうち、御出世あそばします。これしきのお屋敷、来年にはせまくなるかもしれませぬぞ」

といったのは、いまひとりの郎党五藤吉兵衛。

どちらも伊右衛門より十歳上の三十三で、亡父の代から仕えてゐるから、家来というより、叔父さんのような存在である。

なにしろ、十四歳で父をうしなつて放浪した伊右衛門を、この二人が、親つばめが子つばめに哺ませるようになしてこんにちまで育ててきたのである。

五藤家

祖父江家

この二人の家系は、のちに土佐二十四万石の家老、準家老になり、明治までつづく。伊右衛門一豊とともに興り、ともに栄える運命となるのだが、このときの二人は、粗末な茶染めの麻服、足には、このあたりの小作人が用いる、「げげ」

というゾウリをはき、どこからみても、乞食と紙一重のふうていである。なにしろ、五十石の身分で、二人の家来をもつというのが、だいたい無理なのである。

だが、戦功は、

「家来」

によつて樹てゐるものだ。伊右衛門一豊は、自分は米のめしを常食せずに、アワ、ヒエを食い、二人とその家族を養

つてゐる。

二人もまた、一豊の俸禄にたようとせず、合戦のないときには、付近の老百姓に傭われて、食代をたすけていた。

「ご婚礼は、明夜でございますな」

「そう」

伊右衛門一豊の胸がときめいてきた。

「ご家中第一のお美しい嫁御料人であられまする」

五藤は、自分がもらうような笑顔で、うれしそうにいった。

あすは婚礼という夜。

岐阜から七里はなれた美濃不破地方の実家で、さすがに千代はねむれなかつた。

「おかあさま、一豊（伊右衛門）様とは、どのようなかたでございますか」

「またですか」

母親の法秀尼は微笑した。

このあいだから何度、千代はこのおなじ質問を、母親にしてきたかわからない。

「いいひとですよ」

それだけを法秀尼は答える。この利口な婦人は、余計な批評がましいことをいって、娘に無用の先入主を入れるの

をさけているのである。

千代はあかるい娘であった。のちに、

「山内一豊の妻」

という名で、後世にまで日本史の代表的賢夫人といわれるようになった千代も、まだ無邪気な小娘にすぎなかった。

千代の絵像がいまに残っている。

おもなで、眼の切れが異様にながく、唇がまるくて、ちよっとめずらしいほどの美人である。

千代は、利口さを、

「無邪気」

で擬装していた。利口者が、利口を顔に出すほどいや味なものはないということ、この娘は、小娘のところから知っている。

だから、たれからも愛された。

伊右衛門一豊は、父が戦死し主家が没落して流浪の少年期をおくったが、千代のばあいも似ていた。

こんどの縁談がととのったときも、

「お父さまがいらっしゃれば、どれほどおよろこびだったでしょう」

と母親の法秀尼はいったが、千代は父の顔をおぼえていない。

亡父、若宮喜助は、北近江に強勢を張っていた戦国大名浅井氏の家来で、ひとり娘の千代が四歳のときに戦死した。

千代がもしそれ相当の年ごろなら、養子をむかえて、父の家禄をつぐことができたであろう。

が、幼すぎた。

やむなく母法秀尼は千代をつれて近江を去り、美濃にきて、親戚の不破家に身を寄せたのである。

不破家は、美濃三人衆の一軒にかぞえられるほどの大郷士で、当主市之丞いちじやうの妻は、法秀尼の姉にあたる。

千代は、母娘、食客の身ながらも、不破家は彼女を裕福な環境でそだててくれた。

「先方は、貧乏だぞ。千代に辛抱しんぱうができるかどうか」

縁談があったとき、義兄の不破市之丞は心配そうにいったが、法秀尼は、

「貧家のほうほうが、すえに楽しみがあるというものです」

と、一豊の人物だけを見込んで、この縁談を受けたのである。

千代にとっては、血のつながらぬ伯父にあたる不破市之丞は、血がつながらぬだけにむしろ、父親のような感情をもっていた。

だから、いよいよ嫁にやるときまったときなど、

「とうとう、千代はいくのか」

と、この不破地方の小領主は、ぶざまなほどに狼狽ろうばいした。なにしろ、四つのときから、不破家の家族とともに屋敷で

そだった娘である。

「娘をもつものではないな」

と、愚痴をこぼした。

「可愛くなった盛りにやらねばならぬわ」

実母の法秀尼のほうがむしろ落ちついていて、そういう義兄のあわてかたを、おかしそうにわらった。

愚痴のたびに、

「くすっ」

と忍び笑うと、

「なにがおかしい」

と、むきになって怒るから、よけいにおかしいのである。

「おんな親というのは淋しくないのか」

「いいえ、さびしうございますよ」

当然のことだ。とくに法秀尼のばあい、女手ひとつで育

てきた娘である。

その娘を掌中から奪われるという心境は、他人に話して

てもわからないであろう。

法秀尼は、夫の討死ののち尼になったのだが、こんど娘

が嫁ってしまったら、不破屋敷の一隅に庵寺をたててもらい、

事実上の出家をしようとおもっている。

美濃では、いやこれは昭和初年代までそうだが、——一

人出家すれば九族天に生ず、という思想があり、相当豪家では、一族のひとりとは出家させる慣習があったから、この

出家は異様なことではない。

「娘は一豊どのにとつぎ、わたくしは阿弥陀如来にとつぎます」

と、法秀尼は、静かに微笑していた。

「さて、婚礼のことだが」

と、これもすこし以前のこと。不破市之丞は、不破家から嫁を出す以上、相当なことをしてやりたい、と力説したが、法秀尼はそれに対しても、

「いいえ、先方様は、お父様の代には栄えたとはいえ、いまは織田様でわずか五十石のご身分でございます。ふだん着ひととおりと、つかい古しの身のまわりの品々をもたせてやるつもりでおりまする」

と、がんこにこたわった。新夫の一豊にひけめを感じさせまい、という温かな心くばりである。

「そうか。おぬしがそういうならやむをえぬが、これだけは通してくれ」

と、不破市之丞は、一案を出した。金子をもたせてやることである。それも、目録には含めず、千代の隠し金にすることにした。

額は、金十枚。

当時としては途方もない大金で、法秀尼はそれを千代のもってゆく鏡箱におさめさせ、

「この金子は、夫の一大事のときに取りだしますように」

と、千代にいいくめた。鏡は円鏡で、いまは高知市追手筋の藤並神社におさめられている。鏡の裏の文字は、「毎傍玉台凝桂月 未開宝箱似藏雲」。

当日、夕刻から、伊右衛門一豊は、肩衣をつけて、式場となる新居の居間にきちんとすわっていた。

五藤、祖父江のふたりの郎党は、朝から支度にかいまわっている。

「旦那様、嫁御料人のお輿が、中宿までおつきあそばしましたぞ」

と、五藤吉兵衛が駆けこんだときは、陽も沈んで、あたりが薄暗くなっていた。

「左様か」

（落ちつけ）

と自分をしかりつけるのだが、膝にのいている両コブシがつい小さきみにふるえてくるのは、どうしようもない。

「旦那様」

と、祖父江新右衛門が、見かねていった。

「すこし横になられませぬか。左様に硬くなられては体に毒じゃ。御婚儀のはじまるまでまだ一刻（二時間）ほどござりまするぞ」

「左様か」

笑ってみせたつもりだが、笑いが白っぽくひきつった。

（ざまはないな）

自分で、自分を軽蔑したくなる。

当時の婚礼は、夜である。

その式模様も、伊右衛門一豊程度のぶんさいでは、簡素なものだ。

おなじ織田家の家臣で木下藤吉郎秀吉が浅野家の寧々をもらったとき、「かやぶきの長屋で、ゆかにすがきわら敷き、さらにウスベリを敷いて、祝言をした」と、寧々が北政所になってから侍女たちに笑って話した。

一豊のばあいも似たようなものだ。

こういう下級武士の婚儀の儀式も一定していなかったころだから、式次第など、べつにこみ入ったものではない。定刻になった。

中宿から、父親がわりの不破市之丞がまずやってきて、一豊にあいさつした。

門にすでに、あかあかとかがり火が焚かれ、玄関から居室までのあいだ、幾本もの燭台がかがやいている。

「お着きーっ」

と、門前で不破家の小者が、ひと声、犬の遠吠えのような声をあげた。

やがて、千代が、不破家の老女に手をひかれて、しずしずと入ってくる。

衣裳は、白い練絹のウチカケ、白の小袖といっただけの

もので、足もととは素足にわらぞうり。頭にはものをかぶらない。

やがて、一豊の横に着座。

伊右衛門一豊は、真っ正面をむいたままだから、花嫁の顔がわからない。

やがて、盃ごがある。

そのあと、上役、友人に酒食のふるまいがあり、一段さがって、両家の郎党、さらに土間では、小者などが、立食をする。

その間、花嫁は、酒器をもって酒をついでまわるのだが、伊右衛門の網膜には、なにやら白いものがひらひら動いているだけで、瞳をこらして顔を見るなどというゆとりはまったくなかった。

ひとびとが引きあげたあとに、一穂^{つげ}の燭台と、伊右衛門、千代だけが残された。

「旦那様、ふつつか者でございますが、二世の末までよろしくおねがい申しあげまする」

「私こそ」

不器用に答えながら伊右衛門一豊は、あらためて千代の顔をみた。

（なるほど、評判の美人ではある。すこし大柄なのが気になるが）

性質も可愛い女らしい。この可愛い性質の女に、伊右衛門は生涯ひきずりまわされようとはおもわなかったであろう。

千代は千代で、伊右衛門を観察していた。

（ちょっと不満だな）

と千代がおもったのは、伊右衛門がふっくらとした童顔で、武士らしい野太さが欠けているような感じがしたことだった。

それに、背丈は中背。

（これで戦場の槍働きはできるだろうか）

もつとも、伊右衛門がなかなかの武勇の士であるということは、すでに「蔭聞き」で十分に知りつくしている。

だから千代は、ひげのそりあとの濃い顔の、四肢などは駿馬^{うま}のような男を想像していたのである。

（眼が、いいな）

とおもった。考えぶかそうな眼で、しかも機敏^{しんべん}そうであった。こういう眼をもつ男なら単に格闘上手の槍仕よりも、一軍を駆け引きさせる武将にむくかもしれない。

千代の値ぶみがつくづく。

（なによりなことは、気品があることです）

十四歳で流浪して、ちかごろやっと織田家に拾われた身だが、さすがに血は争えない。

山内伊右衛門一豊の生家は、むろん取りたてた家柄では